

平成 27 年度

第 60 回 長野県中学校連合教科研究会

国語科

I	研究テーマ	1
II	趣 旨	1
III	参加校テーマ一覧と参加者氏名・指導者氏名	1～2
IV	研究問題と協議内容	3～7
V	本年度研究会の反省と来年度の方向	7～8
VI	あとがき	8

I 研究テーマ

「生徒が自ら学ぶ言語活動の充実、言語活動の設定はどのようにあったらよいか」

II 趣旨

単元をつらぬく言語活動を通して、付ける力を明確にした指導を中心に据え、生徒が自ら学んでいく授業の在り方を研究していきたい。また、それにとまなう評価をどのようにするか、生徒の姿で明らかにしたい。

III 参加校テーマ一覧と参加者名、指導者名

- 第1分科会 指導者 宮島 卓朗 先生（北信教育事務所指導主事）
司会者 目黒 哲朗 先生（飯綱町立飯綱中学校）
記録者 宮澤 誠司 先生（佐久市立中込中学校）
世話係 鎌倉 大和 先生（信州大学教育学部附属長野中学校）
- 第2分科会 指導者 村田 忠久 先生（東信教育事務所指導主事）
司会者 藤垣 誠 先生（飯田市立旭ヶ丘中学校）
記録者 坂口 香織 先生（飯山市立城北中学校）
世話係 久保 貴史 先生（信州大学教育学部附属松本中学校）
- 第3分科会 指導者 富山 哲矢 先生（南信教育事務所指導主事）
司会者 小沢正太郎 先生（長野市立篠ノ井西中学校）
記録者 石井 和馬 先生（辰野町立辰野中学校）
世話係 戸塚 拓也 先生（信州大学教育学部附属長野中学校）

【第1分科会】

中込	生徒が主体的に学ぶための導入の在り方	宮澤誠司
立科	生徒自らの学びの意欲を引き出し、確かな学力をつける授業のあり方	山田智美
上田第四	自らの読みを意欲的に広げたり、深めたりするためのグループ学習の在り方	高橋 亮
明科	互いの考えを交流することを通して、互いに学び合う国語の授業の在り方	武田純志
常盤	自ら課題を持って、読む力を高めていくことができる言語活動はどうあったらよいか ～文学的文章における批評文の指導～	小島夕貴
柳町	友との交流を通して筆者の主張や論の展開、表現の仕方について自分の考えをもち、それを表現できる力を育てる説明的文章の学習	古川真紀
三陽	自ら考え、判断し、表現する力をはぐくむ問題解決型学習のあり方	細田 亮
飯綱	登場人物の心情を読み取る力を高める指導のあり方	目黒哲朗
附属長野	登場人物の心情をとらえながら古典文学を読む力を高める指導の在り方	鎌倉大和
筑摩野	互いの考えを生かし合い、自分の考えを広げる国語教育のあり方	原 聖一
梓川	基礎・基本の定着を図り、相手や目的、意図に応じて身につけた言語能力を活かす主体的な言語活動を展開する授業のあり方	廣瀬有紗子
附属松本	わたしの読み解きの変容を自覚することのできる国語の学習	遠山恒輝

【第2分科会】

上田第三	互いに学び合い、目的や場面に応じて適切に表現できる生徒の育成	石澤可奈子
岡谷西部	誰もが「わかった」「できた」を感じられる支援のあり方 ～授業のユニバーサルデザイン化～	山崎奈穂美
旭ヶ丘	司会者	藤垣 誠
穂高西	欠席	笠原あゆ美
豊科北	考えを伝え合いながら、言葉の意味や働きを発見していく国語学習	角南紀美子
小布施	楽しくて力のつく国語の学習	松林圭祐
東	家庭学習とのリンクを意識した授業改善	齊藤正一
城北	学ぶ意欲をもち、向上し合う生徒が育つ授業づくり ～言語活動の充実を通して～	坂口香織
北部	さまざまな人やものとかかわることを通して、自己課題を見つけ、意欲的に学習に取り組み続ける生徒の育成	中澤孝明
大岡	生徒と共に創りあげる授業の充実 ～生徒・教師・地域の人々がかかわり合いながら～	山岸和広
附属長野	登場人物の心情をとらえながら古典文学を読む力を高める指導の在り方	多田彩夏
附属松本	わたしの読み解きの変容を自覚することのできる国語の学習	久保貴史

【第3分科会】

浅間	表現力を高めながら、確かな学力が身につくためのわかりやすい授業作り	五味 晶
軽井沢	欠席	石井 彬
北御牧	わかる・できる授業の創造 ～生徒の問いや願いに沿った授業づくり～	藤森祐介
岡谷南部	基礎的な語彙力を高め、さらに表現することの楽しさを感じられるようになるための指導のあり方	山岸亜矢
辰野	わかる・できる・こころ動く授業の創造 ～筋道を立てて考え表現する力を育てる学習を通して～	石井和馬
箕輪	互いの思いを知り、尊重し合える生徒 ～共働学習の中で育む伝え合う力～	伊東雅美
篠ノ井西	司会者	小沢正太郎
更北	主体的に読み、考える力を育てる指導のあり方 ～文学的文章の学習における単元を貫く言語活動を通して～	千野布美子
附属長野	登場人物の心情をとらえながら古典文学を読む力を高める指導の在り方	戸塚拓也 杉木悠利
開成	登場人物の心情に興味を持ち、作品としての価値を感じさせる指導はどうあったらよいか ～文学作品の読み取りを通して～	辻中健斗
女鳥羽	自分の考えと友の考えを関わらせながら、考えを深め合う生徒の育成	村山菜保子
附属松本	わたしの読み解きの変容を自覚することのできる国語の学習	大武宗胤

IV 研究問題と協議内容

【第1分科会記録】

【第1分科会】

1 言語活動の構想について

(1) 発表されたこと、話し合われたこと

- ・説明的文章において、必要感をもたせるために、身近な問題を念頭におき、筆者の主張を読み解いていく授業を構想した。(立科中)
- ・読み聞かせ会で取り上げられた作品を題材とし、その作品から生まれた素朴な疑問を生かした単元を構想した。(飯綱中)

(2) 指導者からのご指導

- ・言語活動の充実には、はじめ、なか(実際の活動の部分)、終わった後を考えることが大切である。はじめから終わりまでが全て繋がっていただかなければならない。
- ・実際の事象や普段の生活に即して必要感をもたせるような授業が最高ではあるが、毎回は難しいので、年に一回、学期に一回は構想していく営みが大切である。
- ・子どもたちは必要感を必ずしももっているとは限らないので、もてるような一仕掛けを考えておく。また、必要感だけにとらわれず、その後のなかの部分を考えておくことが重要である。
- ・言語活動の充実は、教師がその教材にどれだけ惚れ込めるか。つまり、教材研究をどれほどするかによっても決まってくる。

2 言語活動の実際について

(1) グループ内で話し合われたこと

- ・意見交流の場面では読み取りの違い、読み取ったことの違いに着目させて交流させる。
- ・グループの中での役割を決めたり(司会など)、交流の型を決めておく。
- ・各々に役割をもたせ、交流をせざるをえない状況を作り出す。
- ・個人の考えをもった上でグループ活動に入ることが大切である。
- ・そのグループ活動での課題や目的、どういう視点で話し合うのかをはっきりさせておく。
- ・話し合いの中でついていくことができない子どもたちをどうするかを考えていくべき。例えば、進度の同じくらいの生徒でかためるなど、グループ作りも工夫することが必要である。

(2) 指導者からのご指導

- ・ただ答えを見つけたら、教師に教えてもらったりすればいいという姿勢は、これからの主体的な、協働的な学びにはそぐわない。「自分はどうか考えるか」という課題を設定していくなど、能動的な学びが求められる。
- ・意見交流といっても、何に着目して交流するのか、何をどう交流するのかといった中身の部分を構想しておかないと授業が成り立たない。何について考え合うか、学習課題の設定が大切である。
- ・教師は板書で交通整理をしていく。色や場所に意味をもたせ、子どもたちがどこに焦点を当てて考えていけばいいのかを示していく。

3 授業後の評価について

(1) 発表されたこと、話し合われたこと

- ・「商人とオウム」もう一つのタイトルを考える授業の場合では、「作者はなぜ二つのページの明暗をはっきりさせ、明るかった背景を次のページで急に暗く描いたのか。作者の意図を想像しながら自分の考えを書きなさい。(解答はこの物語の話の筋を大きく逸れず、およそ根拠のつかめない解答にはならない範囲で考えることとする。)」を出題した。(飯綱中)
- ・「走れメロス」と「人質」の比較の授業の場合では、「『走れメロス』の最後と『人質』の最後を比較して、

『勇者はひどく赤面した。』という一文はあった方がいいか。(100字程度で書くこと。)」を出題した。

(常盤中)

- ・ 単元の中で思考の過程や単元の終わりでの成果物を生かせるような評価問題を作っていくべきである。
- ・ 答えるにあたっての条件をいくつか用意しておくことが必要である。条件を満たして、道筋が通っていれば正解としたい。

(2) 指導者からのご指導

- ・ 思考・判断・表現を評価する問題をどのように作っていくかを考えていくことが必要である。授業が課題解決型になっているのに、その資質や能力をテストで問わないということは、授業とテストは関係のないものなのかということになってしまう。付ける力がついたかどうか評価できないということになってしまう。
- ・ 思考・判断・表現を評価する問題の作成にあたっては、答えが一つであってはならないことや、思考・判断・表現を評価する問題に行きつくまでに、その呼び水となるような問題を配置しておくことが必要である。

文責：佐久市立中込中学校 宮澤誠司

【第2分科会記録】

1 言語活動としての書く力を高める授業における手立てとユニバーサルデザインについて

(1) 協議したこと

- ・ ユニバーサルデザインについては、特別に支援が必要な生徒に対してという意識ではなく、クラス全員の生徒にとって分かる授業という意識をもって授業づくりを考えたい。
- ・ 生徒の特性に合わせて、マス目のある学習カードを用意したりタイマーで時間を区切ったりするなど、日常の授業の中でユニバーサルデザインを取り入れたい。
- ・ 新聞の「斜面」を活用しながら課題解決的な活動を位置づけ、書く力だけではなく読む力も高められるように実践した。

(2) 指導者からの指導

- ・ 国語科の先生方だけでなく、全ての教科においてユニバーサルデザインの視点をもって授業づくりをしている点が、大変素晴らしい。来年の4月より「障害者差別解消法」が施行され、各学校においても、合理的配慮が義務付けられる。一人一人に特性に応じた支援を考えていきたい。
- ・ 書くことが苦手な生徒に対しては、例えば導入の場面で教師がモデル文を示し、何を、どのように書いたらよいか見通しをもてるようにすることも大切。本実践においても、教師のモデル文が有効であった。また、生徒にとって必要感のある書く題材を選定していることもよかった。

2 「話すこと・聞くこと」の領域における言語活動の選定

(1) 協議したこと

- ・ 地域へのインタビュー活動を繰り返し行ったり、プロの記者からインタビューの仕方を学んだりしてどの生徒にも「話す・聞く」力を高められるように単元を構想している点が大変参考になった。
- ・ 漢詩への興味を高められるように、単元の導入場面で、中国の方の漢詩の朗読を聞かせたことは、よいのではないか。
- ・ 国語の授業内容と家庭学習をリンクさせようとしている点が参考になった。「白文帳」を家庭学習としていた頃と比べ、提出率が低くなる点が課題である。

(2) 指導者からの指導

- ・ 地域の方へのインタビューの実践については、生徒にとっての相手意識や目的意識が明確となる学習となっている。このことが主体的に学習に取り組む生徒の姿につながっている。
- ・ 古典学習については、小学校での学習を踏まえて、どのようにして古典に親しませるかが課題。本実践のように、導入場面を工夫することも大切である。漢詩だけではなく、日本の古典作品についても視聴覚教材を活用して、古典の言葉の響きやリズムを味わえるようにしたい。

- ・授業内容と家庭学習を関連させていくことは大切である。本年度、県の家庭学習のモデル校の一つである県中は、授業の内容を要約するという家庭学習を行っている。家庭学習をどのように評価するかは、各学校で十分に検討するとともに、生徒や保護者への説明を行う必要もあるのではないかと。

3 すべての生徒が意欲的に取り組める「単元を貫く言語活動の工夫」

(1) 協議したこと

- ・「単元を貫く言語活動（課題解決的な活動）」を行った場合、評価をするには生徒の振り返りを分析する必要があるのではないかと。本単元で何を学んだのかを振り返るようにするとよいのではないかと。
- ・古典学習のアプローチの一つとして、古典学習において「単元を貫く言語活動」を設定した授業を行うのもよいのではないかと。

(2) 指導者からの指導

- ・長野県内においても、小学校においては「単元を貫く言語活動」を位置付けた授業の実践が多くなってきている。中学校においても、全単元でなくてもよいので、1学期に1回は単元を決めて実践を行うようにしてほしい。単元の最初に課題を設定し、ゴールを示すことで、生徒が主体的に学習に取り組むことができる。また、本年度の学校訪問の中で、単元の時間数を少なく、コンパクトにした実践もある。
- ・小学校の古典学習では、作品のおおまかな内容をとらえ、言葉の響きやリズムを感じられるように音読をすることが多い。中学校では、さらに古典学習に親しむことができるように、より言葉の響きやリズムを味わったり、読み取った内容を他者に伝えたりするなど、授業を工夫したい。

4 読解における心情追究や読みの深まりを実感できる授業のあり方について

(1) 協議したこと

- ・多様な作品、多様な言語活動で「単元を貫く課題解決的な活動」を行うことで、多様な視点から読み取ることができる。
- ・小学校の教材を中学校で読み直す単元を設定したことで、生徒自身がついた力を見返したり、作品のよさを再認識したりできた。小学生との交流により、自分自身の成長をより認識できた。

(2) 指導者の指導

- ・以前、「やまなし」を教材に、小学校、中学校、高校で実践したことがあるが、小学校では色彩表現や対比を中心に学習を、中学校では作品について話し合う学習を、高校では宮沢賢治の他の作品と関連させながら書評を行った。中学校、高校の生徒たちは、作品をより読み深める姿が見られた。
- ・「単元を貫く言語活動（課題解決的な活動）」を位置付けた授業を行う場合、大切な点が四つある。①単元でつける力を明確にする。②つける力にぴったりの言語活動を選ぶ。③その言語活動を単元を貫いて位置付ける。④児童・生徒の「大好き」「お気に入り」「伝えたい」等の主体的な意識を生かすということである。教材研究については、今までの作品研究に加え、教師自身がその言語活動を行っておくことが大切である。そのことにより、生徒の躓きを予想したり、どの叙述に着目するかなどを考えたりすることができる。

文責：飯山市立城北中学校 坂口香織

【第3分科会記録】

討議1 文章を読み深めるための手だて

1 レポート発表

- (1) 生徒が自ら問を立て、描写の効果を明らかにできるように、三角ロジックを用いて「盆土産」の深読みマニュアルを作る言語活動とワールドカフェ方式の話し合い活動の実践（北御牧中）
- (2) 「大人になれなかった弟たちに……」で、文章だけでなく作者の過去の新聞インタビュー記事の内容も踏まえて、題名に込められた作者のメッセージを読み取る言語活動の実践（開成中）

- (3) 生徒自身の成長からくる「カレーライス」に対する読み解きの変容を自覚させるために、小中交流を通して、自分の読み解きを生活経験とかかわらせて語り合う活動の実践（附属松本中）

2 協議

- (1) 三角ロジック（主張・理由づけ・根拠）を用いることで、生徒の論理的説明力の向上につながった。一方、知識や経験をもとにした主観的な読みから客観的な読みに導く指導のあり方や作品のテーマに迫る手立ての工夫を検討していく必要がある。
- (2) 作者の作品への願いを様々な資料で提示することは、作品の主題に迫るうえで重要である。一方、読む目的を明確にしていく必要がある。そのために、生徒に気づいてもらいたい作品のテーマを教師がしっかりとっておく必要がある。
- (3) 成長と共に部分から全体を踏まえた読みが変わることを生徒が実感できたことは、読書生活を豊かにすることにつながる。交流にかかわるすべての生徒の読みを広げる手立てを検討したい。

3 指導者の先生のご指導

読み深める手だてとして、主張につながる根拠と理由づけは生徒の考えを叙述に返すうえで有効である。学習問題・学習課題の設定は、教師主導の据え方ではなく、生徒に見通しをもたせる上でも、生徒の言葉を生かした据え方が重要である。文章だけでなく筆者の考えや複数の文章との読み比べ、他者との交流を行うことは、自らの考えを深めることに有効である。すべての生徒がグループ活動に参加できるように、個人追究の場面で教師の指導や助言が重要である。グループ編成は考え方や段階に応じて検討していく必要がある。

討議2 学びを活かして「書く」ための手だて

1 レポート発表

- (1) 文章内容の読み取りを基に、本文を自分なりの外国人に向けた「やさしい日本語」に書き換える言語活動の実践（浅間中）
- (2) 意見文作成の目的意識を高めるために、クラスから学年へと発展する代表決定トーナメントの設定、下書きを推敲する際の観点を明確にして、友との交流を図った実践（岡谷南部中）

2 討議

- (1) 本文を書き換えることは学習の目的意識をもつことにつながる。一方、作者が精選した言葉と自分の言葉を比較することは学習の達成感が得にくい可能性もある。実生活との結びつきを実感したり、受け手の視点に立ったりしたうえで学習に入る導入の検討が必要である。
- (2) 推敲の観点を絞り込んだことで、見通しをもった交流が可能となる。一方、生徒の追究意欲を高めるために、相手や目的意識を明確にしたテーマを設定したり、推敲の観点を体験的に明らかにできるように、教師が作成したモデル文を推敲させたりする指導を検討する必要がある。

3 指導者の先生のご指導

書くルールや推敲の観点を与えることは、生徒に学習の見通しをもたせるために有効である。明らかに推敲する必要のあるモデル文を提示して、生徒が自らルールや観点を明らかにしていく学習場面を設定することで、生徒は書いたり推敲したりする必要感を体験的に自覚できると考えられる。また、書けてよかった、で終わるのではなく、次の学習や実生活に生きる指導を行うことが重要である。

討議3 交流を通して学びを深める手だて

1 レポート発表

- (1) 全校パネルディスカッションで地域を題材にしたテーマに対して、個人の考えを広げたり、深めたりする手だてとして、自分と他者の考えを比較検討するための話型を用いた実践（女鳥羽中）

2 協議

- (1) 話型を用いることで、友の考えを踏まえた自分の考えを話しやすくなる効果がある。一方、話型を示さず

とも自然に他者とかがわっていけるワークシート作りも検討していく必要がある。また、パネルディスカッションを経て地域に出る活動を仕組むことで、地域に根差した学校づくりの可能性が広がる。

3 指導者の先生のご指導

全校での話し合い活動が徐々に根付いているのは、学習の目的が明確だったり、個人追究後に他者の考えをくみ取った上で自分の考えを広げたり、深めたりすることができるワークシートの工夫によるところも大きい。一方、話し合い方の指導は小学校で行われていることから、中学校での実態を加味しながら、小学校と中学校の指導事項の系統性を踏まえた指導を展開する必要がある。

討議4 単元を貫く言語活動の実践

1 レポート発表

- (1) 「流氷と私たちの暮らし」の読解を通して中心文の定義を明らかにした生徒が、自分の伝えたい中心を明らかにして新一年生に向けて中学校の良さを紹介する言語活動を設定した実践（辰野中）
- (2) 生徒が自分のカッコいいと思うものを紹介する言語活動を意識させることで、主体的に「最後の晩餐」の文章構成を読み取り、学習事項を生かした書く学習の実践（箕輪中）
- (3) 職業体験学習を経て様々な職業に興味をもっている生徒の実態を踏まえて、演出家になり「盆土産」の名シーンを朗読する言語活動の設定や定期テストと学習を連携させた実践（更北中）

2 協議

- (1) 読む目的を精選することで、生徒の見通しがもてる。一方、自分が中心文だと考える定義が他者とズレた場合、ズレを埋めるために全体で検討する場面を設定する指導が課題である。
- (2) カッコいいものがある生徒にとっては魅力的な言語活動である。一方、そうではない生徒に教師がつけたい力に沿った指導や助言をする必要があった。また、書かせるために必要な文章構成の読解に焦点を当てた指導が大切である。
- (3) 生徒の興味や学習意欲を引き出す導入時に、実生活と関連させた単元を貫く言語活動を設定することは重要である。一方、演出なので方言の発音を検討する余地が残る。定期テストの作文問題で朗読の仕方を選択制にすることや書く条件を設定することで、単元を貫く言語活動とテストのかかわりを生徒が実感することにつながった。

3 指導者の先生のご指導

生徒がやりたいと思える魅力ある言語活動の設定のために実生活とかがわらせた活動を仕組むことは大切である。文章読解を通して、身に付けた読む力が見える言語活動を設定することが重要である。そのためには評価規準を「書くこと」ではなく「読むこと」にすることを検討する必要がある。単元を貫く言語活動のゴールが単元の終末だけでなく定期テストにあることで、生徒の学習意欲の高まりが期待できる。また、本県では「条件を踏まえて書くこと」に課題があるので、授業と定期テストだけでなく、家庭学習との連携も視野に入れる必要がある。

文責：辰野町立辰野中学校 石井和馬

V 本年度の反省と来年度の方向

◎本年度の反省

項 目	内 容
○本年度の研究テーマについて	<ul style="list-style-type: none"> ・一時間一時間の授業が何を指して行われるものなのかはつきりもちながら単元展開を作成することにつながった。 ・単元を通して行われる言語活動が生徒の中に位置付けられるということは、生徒自身が自分の学びの目指す姿を自らもつことでもあるし、自分の学びの見通しをもつことでもあると思う。毎時間が細切れのように繰り返される授業からの脱却を目指す意味で、よかったと思う。

○研究の主な内容と研究の成果について	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの目的意識の大切さを再認識することができた。 ・言語活動を明確にすすめている学校のレポートを読み、具体的なイメージが湧きました。今後、自分の授業でも組んでみたいと思う。
○研究の方法や経過について	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が主体的に学ぶ授業にしていくためには授業の仕方だけでなく、教材の工夫も大切だと感じた。
○研究会当日の運営について	<ul style="list-style-type: none"> ・一日通して小グループによる話し合いだったため、自分の経験を話せたり、他の学校の先生方の様子を聞くことができたりしてよかった。 ・複数校まとめて発表してから意見交換を行うのではなく、一校ずつ行ったので、中身ある意見交換になってよかった。
○研究集録等の Web ページ掲載について	<ul style="list-style-type: none"> ・メールでのやりとりに移行されてきて、やりやすかった。やりとりを気軽にできるという点から、今後も同じ形でお願いしたい。
○本年度運営全般について	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートをレポートに載せてくれている学校が多く、よかった。 ・他の分科会に出ている同僚の先生に連絡が取りやすいため、休憩時間を統一で取ってもらえると、ありがたい。

◎来年度の方向

○来年度の研究テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・「生徒が自ら学ぶ」という言葉がやはり大切だと思う。言語活動をすえればよいのではなく、その言語活動が「生徒が自ら学ぶ」ものになっているか来年度以降も検討していくことが大切である。 ・研究の趣旨には書かれているが、サブテーマに評価に関わることが据えられてもよいのではないか。
○来年度の研究の趣旨	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度継続の方向でよいと思う。
○来年度の研究の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の討議の軸が言語活動の在り方だったため、意見を述べやすかった。来年度も、各校レポートを持ち寄り、テーマに沿った討議ができればよいと思う。
○その他、改善したい点	<ul style="list-style-type: none"> ・各校レポートを持ち寄っての参加であった分、レポートの本数が多く、もう少し討議の時間があればと思う場面があった。3分科会ではなく、来年度は4分科会にし、討議の時間を確保できればありがたい。

VI あとがき

お忙しい時期に、県下各地からたくさんの先生方にお集まりいただき、生徒の学ぶ様子を基に指導のあり方について熱心に討議がなされ、多大な成果を収めることができました。

終日にわたって全参加校の研究内容と今後の方向についての的確なご指導、ご助言をしてくださいました、指導者の宮島卓朗先生、村田忠久先生、富山哲矢先生、レポートをくまなくお読みいただき、綿密な司会計画により協議を深めていただきました司会の目黒哲朗先生、藤垣誠先生、小沢正太郎先生、また、当日の記録及び研究集録のまとめに多くの時間を割いてご尽力いただきました記録の宮澤誠司先生、坂口香織先生、石井和馬先生に心より感謝申し上げます。そして、お忙しい中、日々の実践をレポートにまとめ、研究会を実りあるものにしてくださった参会の先生方に心から感謝申し上げます。

来年度も多くの先生方に参加いただき、国語教育の在り方について熱心な討議がなされることを願い、また、先生方の今後の一層のご活躍を祈念申し上げ、御礼とさせていただきます。ありがとうございました。

委員長 戸塚 拓也
副委員長 久保 貴史